

# 遠藤周作研究

— 作品に見るイエス観 —

岡 本 佳 子

## 目 次

- はじめに
- 一 二つの血の葛藤
  - 二 汎神論的世界——『海と毒薬』
  - 三 運命の連帯感——『わたしが・棄てた・女』
  - 四 神との出会い——『私のもの』
  - 五 神の存在証明——『沈黙』
  - 六 神の探究——『死海のほとり』
- む す び

## はじめに

遠藤氏の作品を読んで、私はその中で描かれているイエスの姿に驚きの目を見張った。何故なら、私が今まで知識として知っていたイエスの姿とは、あまりにも違っていたからである。私が宗教概念として知っていたイエスは、数々の奇蹟を行ない、十字架にかけられた後復活した神々しい神の子としてのイエスだった。ところが、遠藤氏の描くイエスは、奇蹟などまったくできない、哀しい眼をし

た、人を愛することしかできない無力のイエスであった。奇蹟を行なうイエスをどうしても信じることでできなかった私は、遠藤氏の何もできないイエスを知るに至って、カトリックとは無縁の私にでも遠藤氏の描くイエスなら信じられるのではないかと思うようになったのである。

同時に、遠藤氏がカトリシャンでありながら何故このようなイエスを描くようになったのか、このような無力のイエスを描くことよって遠藤氏は何を求めようとしたのかという疑問が起ってきた。そこで、これらのことを中心に、最初のエッセイ『神々と神と』から『死海のほとり』までの作品範囲で、氏のイエス観を考えてみたと思う。

内容は、六つのテーマに分け、それぞれ作品を中心に考えてゆくことにした。

### 一 二つの血の葛藤

遠藤氏は慶応仏文科の学生であった時、カトリシャンとして生きる自分の体内に流れる神々の子としての血を自覚するようになる。

氏はその時のことをエッセイ『神々と神と』に次のように記している。

あの方が目覚めさせて下さったあの血液、あの神々の世界への郷愁があれ程魅力があり誘惑的であつたのは……僕達東洋人が神の子でなく、神々の子であるゆえではないでしょうか。万葉の挽歌や伊勢物語から始まった僕達の長い血統は神々の血統であり汎神論的であり、決して神の一神論的血液ではありませんでした。

遠藤氏は一つの体内に神と神々の子、つまりまったく異質の二つの血を所有しているのである。そして、異質の血を所有するがゆえに、

一神論的世界を知らば知るほど神々の子としての血液がざわめき叫ぶのをきかねばならない

と、内部の苦悩を吐露せざるえないのである。このように、氏が汎神性と一神性の違いに苦しみ、自分の内部の問題として取り組もうとするのはカトリシャンであるからであろう。

東洋の汎神論世界では、自然・神は人間の集合、延長上であり、人間は、神・自然の中の一部なのである。だから、人間はそれらと対立することなく、すみやかに神・自然の中に入れていけるのである。

これに対し、西欧の一神論的世界では神・天使・人間との間に明確な隔たりがあり、人間は神でも天使でもない孤独な存在なのである。人間は常に闘わなければならない、靈魂を神に返した後も審判を受けなければならないのである。

このように、日本と西欧は対立した世界として存在している。そ

れゆえ、カトリシャンであることと日本人であることが遠藤氏の内部で、どのように結びつけられるものなのかが、問題として意識されてくるのである。その問題を、氏は自分の文学活動において考えようとする。

遠藤氏の文学は、日本人としての氏がキリスト教の意味をどのよう受け止め、いかに生きるべきかを問おうとしたものであるといえよう。その根底にあるのは、もちろん、日本の血と西欧の血との葛藤である。二つの血の違和感を基底におき、氏は日本人でありながらカトリシャンとして生きるために、この異質な二つの血の融合、つまり、日本の血を基調として意識しながら、それに西欧の血を融合させ、いかに日本の血を浄め高めていくかを、カトリック作家としての自分の課題としたのである。

## 二 汎神論的世界―『海と毒薬』

遠藤氏のイエス観をみていく上で是非考えておかなければならぬことは、日本人の持つ汎神性存在論的性格である。何故ならば、氏自身が汎神性と一神性をめぐって常に内部で葛藤を繰り返しており、のみならず私たち日本人がイエスを考えていく上で自分たちの持っている汎神性存在論的性格を知っておくことが必要だと思われるのである。

『海と毒薬』は、戦争中、ある医大で行なわれた生体解剖を扱った作品であり、主題は、「神なき人間の悲惨さ」といえよう。

遠藤氏は、作中人物である勝呂と戸田の二人を生々しく描くことよって汎神性の持つ二つの性格を明確に示しているのである。

二人は生体解剖に参加するか否かの意志の自由を与えられている。勝呂は、意志決定の自由があるにもかかわらず、それを放棄するのである。

どうでもいい。俺が解剖を引きうけたのはあの青白い炭火のためかもしれない。戸田の煙草のためかもしれない、あれでもそれでも、どうでもいいことだ、考えぬこと。眠ること。考えても仕方のないこと。俺一人ではどうにもならぬ世の中なのだ。と考える、まったくの無気力な人間なのである。これに対して戸田は、意志決定の自由を放棄してはいない。その戸田が参加した理由は、

これをやった後、俺は心の苛責に悩まされるやろか。自分の犯した殺人に震えおののくやろか。生きた人間を生きたまま殺す。こんな大それた行為を果したあと、俺は生涯くるしむやろか。

という自分自身の倫理意識に対する挑戦のためなのである。

勝呂は、生体解剖の途中に突然、人を殺すという恐怖に怯えるのである。勝呂はつぶやく、「俺あ、とても駄目だ」……「俺あ、やつぱりことわるべきじゃった」そして、「俺あ、なにもせん」……「俺あ、あんたに何もせん」と自分に言い聞かせる。しかし、勝呂は、その時、何もしないという非行為の行為をすでにしているのである。非行為の行為を行なうことによって、勝呂は戸田と同じ運命を通っていることになるのである。勝呂は、非行為の責任を逃れることはできない。何もしないということ自体が、この場合は罪なのである。「この受身の姿勢こそ、まさしく汎神主義が発生する絶好の温床」(『カトリック作家の問題』)とみるカトリシャンとしての

氏のきびしい目がそこにある。

これに比して戸田は、生体解剖の後に感じるであろう、心の苛責を期待していたのにもかかわらず、戸田に残ったのは、言いようのない幻滅とけだるさだけであった。人を殺す前と、殺した後の彼らを取りまく世界は何も変わらなかったのである。戸田は、「なぜや、なぜ俺の心はこんなに無感動なんや」と、自分の不気味な心を発見する。一切の苛責を麻痺させてしまう「不気味な心」こそ、汎神主義のもう一つの性格なのである。何故なら、汎神的人間は一神的人間が信じているような神の罰を意識しないからである。

汎神的人間を罰するのは世間であり、世間の罰だけでは本当の意味で人間は変わりえない。汎神的人間の文化は「恥の文化」である。世間に恥をかかないよう、汎神的人間は絶えず世間を意識して生きてきた。その結果、自己の目よりも世間の目を重視するようになったのである。それゆえ、汎神的人間にとっては罪の意識に苦しむより、そのために世間に罰せられて社会的存在の基盤を崩壊させられるかどうかの方が大問題なのである。罪を意識して苦しんでこそ苛責は起るものなのであるから、このように罪を意識して苦しまない以上苛責が起ろうはずはないのである。

私は、日本人でありながらカトリシャンとして生きようとする氏の、日本人の汎神性を敏感にとらえる鋭い目に感嘆せざるをえない。武田友寿氏の言われるように、毒薬を薄めて解毒してしまいう海、この海こそが汎神性の持つ魔性そのものを象徴しているように思われるのである。

### 三 運命の連帯感―「わたし」が・棄てた・女」

遠藤氏はつねに「愛」の意味を求め、「愛」を語り、「愛」のかたちを描き続けようとしている。そして、この「愛」は運命の連帯感といえるものである。

『わたし」が・棄てた・女』の主人公ミツの一见愚鈍とも思われる憐憫の情が、実は私たちにはとうてい真似のできない崇高な感情であり、それが運命の連帯感に向かって成熟していく過程を、遠藤氏はみごとに描き出しているといえる。

ミツは、人が苦しんでいるのを見る時が一番辛く、自分が何かをその人のためにしてあげればその人の苦しみが少しでも取り除けると思った時、自分の事などは構わないでその人のために尽くす女の子なのである。

吉岡がミツを旅館に連れ込もうとした時、ミツは、必死に拒んだ。しかし、吉岡の

俺の右肩はゆがんでるし、足も少しびっこなんだ。だから女の子にも相手にされない。カタワものみたいだから今まで一度だって女の子に好かれたことはないさ。……ふん。君にもふられたしな。

という言葉を聞いたとたんミツの心には、「可哀そう……」という憐憫の情がわいてきた。喘ぎながら一つ一つ、言葉を切り、悲しそうな眼をしてミツは吉岡につぶやくのだ。

「そうだったん。そんなら……連れてって。」と。

しかし、ミツの憐憫の情は単なる同情的な感情ではない。それは次の会話によってわかると思う。

それらの人間の人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔がミツに囁くのだ。

(ねえ。引きかえしてくれないか……お前が持っているそのお金が、あの子と母親とを助けるんだよ。)

(でも。)とミツは一生懸命、その声に抗う。(でも、あたしは毎晩、働いたんだもん。一生懸命、働いたんだもん。)

(わかってるよ。)と悲しそうに言う。(わかっている。わたしはお前がどんなにカーディガンがほしいか、どんなに働いたかもみんな知ってるよ。だからそのお前にたのむのだ。カーディガンのかわりに、あの子と母親とにお前がその千円を使ってくれるようにたのむのだよ。)

(イヤだなア。だってこれは田口さんの責任でしょ。)

(責任なんかより、もっと大切なことがあるよ。この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ。そして私の十字架はそのためにある。)

人間の人生を悲しそうにじっと眺めている一つのくたびれた顔こそ氏の描こうとするイエスであり、「この人生で必要なのはお前の悲しみを他人の悲しみに結びあわすことなのだ、そして私の十字架はそのためにある」と言うイエスは、遠藤氏が描こうとしている「愛」の実践者、運命の連帯者なのである。イエスの声に従って我執をこえ、無意識のうちに愛の行為をしたミツも運命の連帯者として進むことを暗示されている。

ミツはハンセン氏病と診断されて復活病院に入院する。そこで、みんなが同じ運命、苦しみと辛さを分けあって生きているのであった。ミツは誤診だった。しかし、ミツは復活病院に残るのであ

る。患者としてではなく、不幸に泣く患者を世話する人間、患者の苦しみを自分の苦しみとする人間としてである。遠藤氏は、その日のことを次のように描写している。

雲の間から幾条かの夕陽の光が東のように林と傾斜地とにふり注いでいた。その畠で三人の患者が働いている姿が豆粒のように小さく見える。

ミツはその落日の光を背にうけながら林のふちに立ちどまつた。あれほど嫌悪をもって眺めたこの風景がミツには、今、自分の故郷に戻ったような懐しさを起させた。林の一本の樹に靠れて森田ミツはその懐しさを心の中で噛みしめながら、夕陽の光の東を見あげた。

私は、この場面を読む時、心が洗われるような感動を覚える。雲の間からふり注ぐ夕陽の東は神の恩寵ではないだろうか。そして、ミツが「懐しさを心の中で噛みしめながら、夕陽の光の東を見あげた」時、これからは自分の悲しみを他人の悲しみに結びあわせて生きていこう、運命の連帯者となろう、ということがはっきりと自覚をともなつてミツの心に意識されたのではないだろうか。復活病院の修道女がミツを次のように語っている。

ミツちゃんは苦しむ人々にすぐ自分を合わせられるのです。ミツちゃんには、苦しんでいる者たちを見るのが、何時も耐えられなかつたのです。(中略)ミツちゃんはその苦しみの連帯を、自分の人生で知らず実践していたのです。

ミツに囁いた「くたびれた顔」のイエスのところがミツのなかにずっと生きているのではないだろうか。遠藤氏はミツに託して「愛」つまり、運命の連帯感を語っているのである。

ミツは、小説の終章において、修道女にとつては「理想の人」、吉岡にとつては「聖女」として映つてくるのである。ミツは凡俗で愚鈍な人間である。教養もなく、また魅力ある人間でもない。そんなミツが何故彼らには高い存在として映るようになったのか。ミツをそのような人間たらしめたのは何であつたのか。それはもちろん彼女の、苦しみを連帯せずにはいられないところ、「苦しんでいる者たちを見るのが、何時も耐えられなかつた」彼女の「愛」を求める心なのである。それはまた、遠藤氏が常に求め続けている「愛」でもあるのである。

#### 四 神との出会い——『私のもの』

遠藤氏の短編小説は、ほとんど私小説的形態をとっている。それは短編小説の材料が氏の信仰生活からとられているという事情からだけでなく、主題そのものが私的体験に密着しているからである。この『私のもの』も例外ではない。私たちは、この作品において、遠藤氏の他人の意志で入信したあとの動揺と苦悩を知ることができ、この中で氏は、自分を勝呂という主人公に託して語らせている。

勝呂は自分の意志ではなく少年の経験として洗礼を受けたのであつた。そして、その時から「あの男」(イエス)は、教会で愛しもせざう口に出した誓いを本気にして、勝呂のところに行って来たのだ。それ以来「あの男」は、いつも哀しい眼で勝呂を見つめているのである。

『私のもの』の中に、次のような文章がある。

人はうつくしいものや綺麗なものに心ひかれるが、それはもちろん愛などではない。

これは、遠藤氏の愛の思想を語った部分であるが、遠藤氏において愛とは放棄しないこと、どんなことがあっても棄てないということではないだろうか。

彼が「この男」を本気で選んだのではないんだと罵る時その犬のように哀しそうな眼はじっと彼を見つめ、泪がその頬にゆっくりとながれる。それが「あの男」の顔だ。宗教画家たちが描いた「あの男」の立派な顔ではなく、勝呂だけが知っている、勝呂だけの「あの男」の顔だ。私は妻を棄てないように、あなたも棄てないだろう。私は妻をいじめたようにあなたをいじめてきた。今後も妻をいじめないようにあなたをいじめぬと言う自信は全くない。しかしあなたを一生、棄てはせん。

ここに、私は遠藤氏の赤裸々な信仰告白を聞くような興奮を覚えるのである。

「あの男」は、罪を罰する厳しい神ではなく、あらゆる蔑すみにじっと耐え、いつも哀しげな眼差しで人間の弱さを見つめ、ゆるしつづける母なるものに似た「神」なのである。

氏がもともとつづけた神は厳しい父なる神ではなく、弱々しくやさしい母なる神であったのである。

『私のもの』は、遠藤氏のもともとているイエスを私たちに感じさせてくれる作品であるが、ここで忘れてはならない大事なことは、イエスの眼がなぜ哀しげな眼であるかを考えることだと思ふ。

## 五 神の存在証明——『沈黙』

『沈黙』という作品は、実にさまざまな問題を提出した作品である。私は、さまざまな問題の中から一神論と汎神論の異質性を基底として、遠藤文学の基軸ともいえる神の存在証明という問題を取りあげようと思ふ。

遠藤氏は『沈黙』において、神はいるのか、いないのかという二者択一の極限まで追いつめることによって、沈黙を守りつづけてきた神に愛を語らせ、神はいるのだという神の存在証明を成しとげようとしたのである。

しかし、ここで注意しなければならないことは、沈黙を破った神は氏自身が求めつづけているところの哀しい眼をした、苦しみをわかちあう運命の連帯者としてのイエスだったことである。

氏は『沈黙』において、歴史や教会に無視されている人間に再び人生を語らせることによって神を語ろうとしたのであった。

氏がどのような人生を通して、どのような神の姿を描こうとしたのかを考えてゆきたいと思ふ。

ロドリゴとガルベは崇高な使命感によって危険を顧みず日本に潜入した司祭であった。

キチジローは、性格は善良なのであるが、意志の弱さによって自分の信仰を守り通すことのできない弱者として描かれている。その弱者のキチジローが呟いた

「なんのために、こげん苦しみばデウスさまはおらになさつとやろか」

「バードレ、おらたちあ、なあんも悪かことばしとらんとに」

という言葉が、高貴な使命感に燃えているロドリゴの心に

迫害が起つて今日まで二十年、この日本の黒い土地に多くの信徒の呻きがみち、司祭の赤い血が流れ、教会の塔が崩れていくのに、神は自分にささげられた余りにもむごい犠牲を前にして、なお黙っていられる。

という「神の沈黙」に対する疑問をおこさせるのである。これがロドリゴにとつての初めての「神の沈黙」に対する疑問であった。

しかし、まだこの時には「あなたはいつまでも沈黙を守られたが、あなたはいつまでも黙っていられない筈だ」という信頼があったのである。だが、神はかたくなに沈黙し、ロドリゴの心には「神の沈黙」に対する恐怖が次第に広がっていった。

神は本当にいるのか。もし神がいなければ、幾つも幾つもの海を横切り、この小さな不毛の島に一粒の種を持ち運んできた自分の半生は滑稽だった。……（略）……首を落された片眼の男の人生は滑稽だった。泳ぎながら、信徒たちの小舟を追ったガルーベの一生は滑稽だった。

神が存在していないとすれば、今までの苦しみはすべて滑稽な劇でしかない。というところに、神はいのか、いないのかという問題が重要なこととして意識されてくるのである。

汎神性について背教司祭フェレイラはロドリゴとの対話において次のように語っている。

「知ったことはただこの国にはお前や私たちの宗教は所詮、根をおろさぬということだけだ」

「彼等が信じていたのは基督教の神ではない。日本人は今日までフェレイラは自信をもって断言するように一語一語に力を

こめて、はっきり言った。「神の概念はもたなかったし、これからもでないだろう」

フェレイラのこの告白は、遠藤氏が『神々と神と』以来、汎神論と一神論の異質性をめぐって考えつづけた思いを語つたものと思われる。

「なぜ彼等があそこまで苦しまねばならぬのか。それなのにお前は何もしてやれぬ。神も何もせぬではないか」

ロドリゴに棄教を迫るフェレイラはこう詰問する。「基督は転んだらう。愛のために。自分のすべてを犠牲にしても」とフェレイラが言うとき、その転んだイエスはフェレイラのイエスだったのである。

哀しそうな目をしてこちらを向いているあの人はロドリゴにいった。

踏むがいい。お前の足は今、痛いだらう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだらう。だがその足の痛さだけでもう充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから。

踏絵に足をかけることよつてロドリゴは自分のイエスをつかんだのである。

神は沈黙していたのではなかった。苦しんでいる人たちと一緒にイエスも苦しんでいたのだ。ロドリゴのイエスは運命の連帯をしようとする、弱者のためのイエスといつても不自然ではないだらう。

「神」がもし「愛の神」であるならば、このような人間の弱さを慰め、その罪を赦し、その苦しさをわかちあう「神」でなければならぬ。弱者をみつめ、弱者の苦しみを共感しながら描く遠藤氏は、

氏のもとめる「神」の姿を弱者の神としたのであろう。遠藤氏流にみるならば弱者である私にとって、氏の求めた弱者の神は非常な親近感をもって感じられる。

氏は、運命の連帯感というかたちでの神の愛を、棄教という問題において極めてリアルに描きだしているのである。

## 六 神の探究―『死海のほとり』

遠藤氏がこれまで描いてきたイエスは、哀しい眼をして、苦しみをわかちあいたいという運命の連帯感としてのイエスであった。

『死海のほとり』において氏は、自分自身のイエス、無力なイエスの生きざまを描こうとしたのである。氏の分身と思われる「私」は、自分のイエスの生涯を見つめ直すと同時に、ユダヤ人収容所で死んだコバルスキ（ネズミという渾名の男）の姿をも求めようとしている。

では、「私」（遠藤氏）にとつてのイエスはどうな人間であったのか、イエスを同時代の人々の眼から描こうとした「群像の一人」を中心として見てゆきたいと思う。

死にかけた老人の枕元で一夜をあかし、子を失った母親のそばにじつと腰かけ、夕暮、眼の見えぬ老婆の手を握ってはいしたが、彼等を治したことはなかった。

人々は、イエスに奇蹟を求めたが、イエスにできることは、人々の苦しみを一緒に背負うということだけだった。苦しんでいる人々の手を握り「そばにいる。あなたは一人ではない」と呟くことだった。母を失った子供や、夫に死に別れた妻が、なぜ治してくれなかった

のかと愚痴を言う時、イエスの哀しい眼には辛そうな光があった。何もできない、無力なものこそ、遠藤氏の求めるイエスなのである。捕えられたイエスと大祭司アナスの次のような会話がある。

「結局、お前は何もできず、何の役にも立たなかった。することなすこと、一つの実も結ばなかった」

「何もできず、何もかも失敗すると、自分でもわかっていました」

イエスは自分の行為、愛の無力さということを知っていた。知っているがらなお、人々を愛そうとしたイエスは、真に愛の人ではないだろうか。イエスの枯枝のように細い手足、みにくい貧弱な体、これこそ愛の肉体ではないだろうか。イエスは人々を救うことはできない。しかし、人々の苦しみを自分が変わって背負うことだけ是可以で思っただけである。だから、イエスには十字架の死が必要だったのではないだろうか。

すべての死の苦痛を、われに与えたまえ。もし、それによりて病める者、幼き者、老いたる者たちのくるしみがとり除かるるならば、もつとも、みじめな、もつとも苦しい死を……

イエスは愛に生きた人であるがゆえに、人々の苦しみを一人で背負ったのである。

イエスの愛は死によって消えたのではない。何千年という時空を超えた今も、イエスは愛を語りつづけているのである。

「私」が探し求めた弱々しいあのコバルスキのそばにも、イエスはいた。

彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずっているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキ



と同じようにみじめな四人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました……

この時、コバルスキも何千年もの昔の人と同じように聞いたのであろうか。「あなたは一人ではない。いつも、あなたのそばに、わたしがいる」というイエスの愛の呟きを。

イエスがいつも哀しい眼をしていたというのは、人間の苦しさ、弱さを見つめていながら、ただ手をにぎって「あなたは一人ではない。あなたの苦しみを私も一緒に背負いたい」という愛の言葉しか呟けなかったからだと思う。愛の無力なことを自分で知っていないが、人を愛することしかできなかったイエスの悲しみが、その哀しい眼に投影されているのではないだろうか。

遠藤氏はつねに無力なイエスを描いてきた。手ばかりにぎって奇蹟を行なえない無力のイエスは同伴者というかたちで遠藤氏の中に存在を意識させ、同伴者というかたちでのイエスの復活を信じさせたのである。

日本人でありながらカトリシャンとして生きるために、二つの血の融合を自分の文学的課題とした遠藤氏は、自分の愛のイエスを求めつつ、ここにおいて同伴者としてではあるがイエスの復活を信じられるまでに至ったのである。

そして、イエスを信じなかった私も、復活という言葉にはまだ抵抗を感じるものの、遠藤氏が描いてきた、無力のイエス、哀しい眼をして、あなたのそばにはいつも私がいる、あなたの苦しみを共に背負いたいという同伴者としてのイエスなら、心情的に理解できるようになって来たのである。

## む す び

遠藤氏はこれまでの文学活動における汎神性と一神性の二つの血の融合の戦いの結果、人間の弱さを慰め、罪を赦し、苦しさを分かちあう運命の連帯者、同伴者としての無限の愛のイエスを自分のものとして捉えることが出来た。弱者に焦点をあて、人間の罪を罰する神ではなく、人間をひたすら赦し、何ものも求めない、愛そのもののイエスとして、遠藤氏はキリスト教を受け止めたのである。

遠藤氏が愛のイエスを描くことよって目指した人間の生き方とは何であらうか。私たちはそれを見ることが出来る。遠藤氏は作中人物の生きざまを通して私たちに語りかけているのである。

『わたしが・棄てた・女』では森田ミツの姿をかりてこう語っている。

ミツちゃんは苦しむ人々にすぐ自分を合わせられるのです。  
(……略……)

ミツちゃんはその苦しみの連帯を自分の人生で知らずに実践していたのです。

ここでは、他人の苦しみを自分の苦しみと結び合わせ、同じ運命を背負う運命の連帯者、同伴者として生きることを示している。

また、『死海のほとり』では、無力のイエスを通して私たちに次のように語っている。

死にかけた老人の枕元で一夜をあかし、子を失った母親のそばにじっと腰かけ、夕暮、眼の見えぬ老婆の手を握ってはいたが、彼等を治したことはなかった。

人々を救う力は持つてはいないが、ただそばにじつといて、「あなたは一人ではない。あなたの苦しみを一緒に背負いたい」と啖く人間。愛の無効さ、行為の無力さを知っているがからも人間を無限に愛し、愛に生きようとする生き方をここで示している。

遠藤氏は十七歳の時、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』を読んで、ヤジ・キタの生き方に共鳴したという。世のため、人のため全く役にも立たず、いてもいなくてもいいような人間であるのに、その人間が存在しているというだけで心が柔らかくような気持ちになる。遠藤氏が求め描いた無力のイエスとヤジ・キタとはどこか相通ずる所があるように思われる。遠藤氏はヤジ・キタの生き方と自分の文学的課題のイエスとを結び合わせ、ここに無力の愛のイエスを捉えたのである。愛の無力さを知りながらもなお人間を温かく見つめ、慰め、人間の苦しみを共に背負って愛に生きようとする生き方こそ、遠藤氏が自分自身のイエスを捉えることにより目指した人間の生き方なのではないだろうか。

日本は明治の時代から近代化を進めてきた。西欧の真似をし、西欧的なものを崇拜し、日本的な素晴らしいものをどんどん葬り去った。そして今、日本人の心は、故郷を見失い、混乱し、荒廃し、よりどころとするものを持ちえないでいる。これから一体どうするのだろうか。どんな方向に進んで行こうというのだろうか。

それはまだまだ暗中模索の状態であり、日本人の前に進むべき道は示されていないのである。このような状況の中にあつて、今までにない全く新しい考えに基づく遠藤氏の目指す人間の生き方も一考の余地があるように思う。この点において、遠藤氏のイエスはこれからの日本人の進む方向に一つの手掛りをあたえるものであるとい

えよう。

#### 〔評〕

ある調査によれば、日本の青年は、伝統的な家族主義と西欧流合理主義の両者を同時に求めているそうである。前者は神々の世界に住む人々のものであり、後者は神の世界に住む人々のものである。遠藤周作は、この両者を身内にもち、二者択一でない第三の道を歩もうとしている。これを宗教の問題に限定するなら、日本人の多くは無縁のことと考えるかもしれない。しかし、文化論の一環として考えるならば、われわれ日本人の切実な問題であり、前述の調査結果は願望ではなく、むしろ現実そのものと言ってよいであろう。横光利一は「旅愁」において、東洋と西洋の文化を論じ、純血を求めたが、これを超えるものは、混血とも言うべき遠藤周作の道ではないかと思われる。

この論文は、遠藤の示すイエスが、神に通じていない倫理をもつわれわれ日本人にも理解でき、体感できるものであることを明らかにしている。副題に「イエス観」とあるから、これでよいのだが、遠藤周作論として見るならば、ぐうたら遠藤のヤジ・キタの生き方と、無力なイエスとに相通ずるものがあるとしながら、その関係を追究していない点が惜しまれる。

(江後寛士)